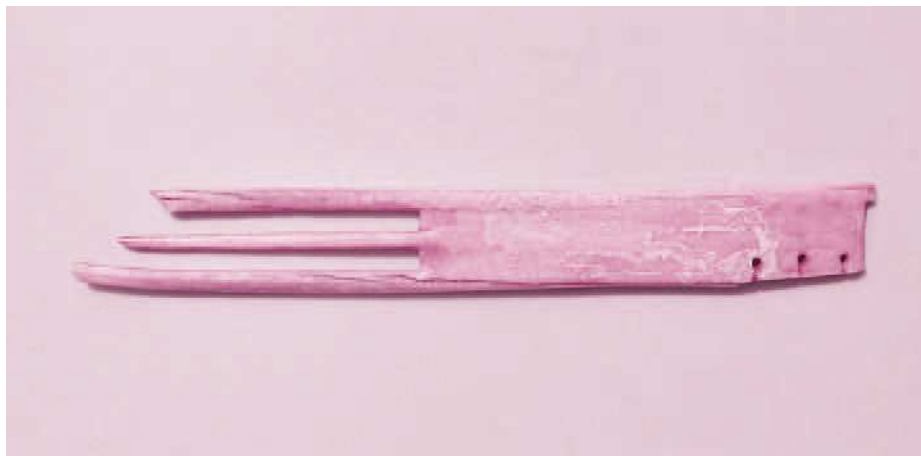




北方民族博物館だより

No.94



H4.33.6 骨製網針^{あばり} イヌイト 19世紀
カナダ マッケンジーデルタ地帯 16.7cm

海洋資源に恵まれた北方地域において、網漁は代表的な生業活動のひとつである。北方の多くの地域では、イラクサ科植物や樹皮などの植物繊維から漁網を作ってきた。植物が生育しづらい極北地域では、アザラシの皮ひもや動物の腱製の糸で網を作っていた。網針は漁網を編むための道具である。木製が多い中で骨製の例は珍しい。写真左側の先端部と右下の隅が破損している。右下隅には補修のための孔が3つ開けられており、直して使っていたことがわかる。

目次 Contents

- 1 表紙 骨製網針
- 2 - 3 第29回特別展「船、橈、スキー、かんじき 北方の移動手段と道具」
- 4 北海道博物館紀行「北海道大学総合博物館」／講座「サハリン州郷土博物館の諸活動」
- 5 講習会「フィンランドの伝統装飾ヒンメリづくり」／講習会「キエプティンひも編み・カレリアン刺繍」
／平成26年度アイヌ文化理解研修会「体験して学ぶアイヌ文化(2)」
- 6 INFORMATION



第29回特別展

船、橇、スキー、かんじき 北方の移動手段と道具

2014. 7. 12-10. 5

北方地域では限られた素材から移動や狩猟・漁労など生業活動に必要な船や橇、スキー、かんじきといった雪上歩行具を開発してきました。こうした北方の移動手段と道具は各地で発達しながら、寒冷な環境への適応という共通性ととともに、地域的な特徴や伝統文化を反映しています。以下に、各展示コーナー別に展示資料とその特徴について概要を報告します。

北方の船

<丸木船>

樹木が成長可能な地域では丸木船が造られ、川や湖などで利用されてきました。丸木船を海で使うためには、アイヌの板綴り船（模型）や船首・船尾に材を継ぎ足した北アメリカ北西沿岸先住民ヌートカのカヌー（実物）のように、波に耐える構造として船首や船尾、舷側を嵩上げしなければなりません。

<樹皮船>

北方の針葉樹林帯にはシラカバ等の樹皮を船の外板（船殻）とする樹皮カヌーを利用してきた地域があります。北アメリカの北方針葉樹林帯の各地ではシラカバ樹皮製のカヌーが造られてきました。剥したシラカバ樹皮を必要に応じて切り貼りしたものを船殻として、形状を保つために舷縁材や肋材を加え、船殻を補強する薄板を内側に敷き詰め、さらに船首・船尾を補強します。ツル性植物などで縫い合わせた縫い目や接合部を松脂と動物性油脂を加熱して溶かしたシール材で塞ぎ、完成します。軽量で陸路の運搬に適していて、ヨーロッパ人による毛皮交易にも利用されました。

いっぽう、エニセイ川やレナ川流域のエベンキ、アムール川流域のナーナイなどユーラシア大陸の民族にもシラカバ樹皮製のカヌーが知られています。展示資料はナーナイのシラカバ樹皮カヌーです（写真中央）。



展示風景

<皮船>

極北・亜極北を代表する船は、木枠構造に獣皮を被せた皮船です。小型で乗員席を除いてデッキも皮で覆われるカヤック型とやや大型でオープンデッキのウミアック型があります。展示された実物の皮船は2艘で、一つはカナダ極北の内陸部で使われたカリブー（野生トナカイ）猟用のカヤックで、被覆にはカリブー皮が使われています。もう一つは市立函館博物館所蔵の3人乗りカヤックで、明治8（1875）年に開拓使一行によって千島列島のシンシル島で収集された、文化的にも歴史的にも大変貴重な資料です。



3人乗りカヤックの展示

北方の橇

<トボガン>

人が牽引する簡易なもの、イヌが牽引するイヌ橇が古くから存在した橇の形態と考えられていますが、シベリア北部やスカンディナビア半島などのツンドラ地域では、トナカイが橇を牽引するトナカイ橇が発達してきました。

今回の橇の展示では北方諸民族の橇の基本的型式が網羅されています。北アメリカの極北・亜極北の針葉樹林帯では、先端を半円形に曲げた板状の橇“トボガン”がイヌ橇あるいは手牽き橇として利用されてきました。トボガンは滑走板と荷物や人を載せる積載板を兼ねていて、荷や人が落ちないように布袋やサポートが取り付けられています。展示されたトボガンは、アサバスカのイヌ橇とアラスカ北部のクジラ髭製の手牽き橇です。

<サミのボート型トナカイ橇>

サミのトナカイ橇は大変ユニークな形状で、サンタクロースの本来のトナカイ橇と考えられています。西洋型ボートとよく似た構造で、先端を上向きに大きく湾曲させた厚く幅広い材が船の竜骨（船首から船尾にかけて船底を通すように配置された構造材）と同様に中心材を構成しています。竜骨の左右に各4枚、計9枚の板が7つの肋材で固定され、船底と舷側を構成し、橇の後端部は椅子の背もたれ状の板材で塞がれ、“竜骨”の後端はさらに10~16cmほど突出しています。この幅広い“竜骨”がサミのボート状橇の主要な滑走板となっています。

<カナダ極北・グリーンランド型イヌ橇>

アラスカ北部の一部およびカナダ、グリーンランドのイヌイトの基本的なイヌ橇の型式は、2本の滑走板に直接横木を7、8本から10数本渡して皮ひもで固定し、横木に人や荷物を直接積載します。滑走板と横木が皮ひも（ロープ）だけで固定され、橇はしなやかな動きをすることで雪面や海氷上の凹凸によるショックを和らげています。

＜アラスカ型イヌ櫓＞

展示したアラスカ・エスキモーのイヌ櫓は最近造られた比較的大型の櫓で、滑走板から直立する長い支柱の中間部に人や荷が載る積載棚が造られ、支柱上端には落下防止用のレールが取り付けられています。本来は滑走板にクジラ骨製の細長い板が取り付けられていました。

このような滑走板、直立の支柱と積載棚および支柱をつなぐレールという、アラスカ型イヌ櫓の構造は、少なくとも1870年代には存在していましたが、当時の櫓には滑走板と上部構造をつなぐ直立支柱とともに、左右の滑走板を跨いで固定するアーチ状の支柱がありました。

＜イテリメンのイヌ櫓＞

市立函館博物館所蔵のイヌ櫓は明治8（1875）年にカムチャツカのペトロパブロフスクで収集されたアーチ状支柱のイヌ櫓です。この形式の櫓は18世紀前半にクラシェニンニコフによって記述されたイテリメンのイヌ櫓で、現存する資料は少なく、大変貴重なものです。

＜コリヤークのトナカイ櫓＞

かつてアラスカおよび北東アジアでアーチ状支柱の櫓が一般的であったと考えられていますが、近年ではチュクチ、コリヤーク、ユカギールおよびエベンの一部のトナカイ櫓にアーチ状の支柱が使われています。展示されたコリヤークのトナカイ櫓は乗用、テントの支柱運搬用および軽量に造られた競争用の3種です。

＜アムール・サハリンの櫓＞

アムール・サハリン地域の櫓はイヌ櫓もトナカイ櫓も支柱が直立しています。展示された櫓は、アムール川下流域のナーナイのイヌ櫓とサハリンのウイльтаのトナカイ櫓です。

＜西シベリアの櫓＞

西シベリアでは支柱が八の字形に横に開き、なおかつ後ろ側に傾斜した傾斜型支柱の櫓が一般的です。イヌ櫓にも一部で傾斜型櫓が遺存的にみられますが、傾斜型はネネツ、ハンティ・マンシ、ガナサン、ケットなどのトナカイ櫓の基本的な型式となっています。傾斜型櫓としては唯一点、国立民族学博物館所蔵のケットのトナカイ櫓模型が展示されました。



櫓の展示

スキーとかんじき

北方諸民族は大きく分けて2種類の雪上歩行具、スキーとかんじきを利用してきました。北アメリカでは楕円形、あるいは細長い木の葉状の木杵の間に2～4本の横木を取付け、前後の隙間を細い皮ひもで網目に編んだかんじきが

一般的です。

いっぽう、北ユーラシアではスキーが利用され、サミは細長い滑走用スキーを利用し、シベリア北部から沿海地方では比較的幅広く短い板に、斜面を登る際の滑り止めとなる毛皮（アザラシ皮やシカ類の脚の毛皮）を滑走面に装着したスキーが狩猟用に使われてきました。

北海道アイヌのかんじきは、瓢箪型ひょうたんの比較的小さな木杵の前側と後側に細い横木を何本も取り付けた輪かんじきが使われていました。また、国立民族学博物館所蔵の北海道アイヌのスキー状かんじき、およびアリューシャン列島アツ島で収集されたスキーは、これまで一般には知られていない、大変貴重な資料です。



北アメリカのかんじき

映像展示

映像展示は、1) 図録にも所収された大正10(1921)年のおおとり鵬丸によるカムチャツカ・チュコトカ方面への航海に際して撮影された写真、2) クリー・インディアンの樹皮舟など5種の北方の舟づくりを収めた当館制作映像の「北方の舟をつくる」、3) 常設展示で展示されている「移動手段」、以上の3つを3カ所のモニターで展示しました。



サミのスキー

特別展期間中は無休で開館し、連日、熱心な観覧者にご覧いただきました。最後になりましたが、今回の特別展に多大なご協力をいただきました機関・皆様に感謝申し上げます。



展示解説会の様子

(学芸グループ 渡部 裕)

北海道博物館紀行

北海道大学総合博物館

2014. 6. 7

講師 津曲 敏郎 氏（北海道大学総合博物館 館長）

「北海道博物館紀行」では、毎回講師をお招きし、道内の博物館活動について紹介いただいています。今回は北海道大学総合博物館について、津曲館長から活動内容などを分かりやすく解説いただきました。

津曲館長が考える大学博物館の意義は、大きく分けて3つあるといます。まず、大学内の各研究者の業績を一元管理して利活用できるようにすること、大学の歴史や研究の内容、研究の実社会への応用について紹介すること、そして教育の場として展示や普及活動、情報の発信、内外の博物館との連携を行うことです。「知識のバーチャル化」に対抗するため、本物のモノがもつ力を利用しながら、「開かれた大学」の窓口としての役割を目指しています。

北海道大学総合博物館は、札幌農学校以来130年余の間に蓄積した400万点の標本と、生物の種を認定する元となる1万点を超すタイプ標本を収蔵しています。

津曲館長は、資料（モノ）は情報（コト）とセットになってこそ、見る側の人間（ヒト）にとって意味をもつものであると考えます。この考え方にに基づき、モノにこだわる博物館を目指して活動を進めてきました。具体的な活動内容として、多彩な企画展示、普及活動、講座、セミナー、コンサートがあります。

博物館の紹介の際に、学生制作を含む2本の紹介ビデオを上映いただき、また博物館のホームページからグーグル・ストリートビューで館内の探検ができることを教えていただきました（北海道大学総合博物館ホームページ→展示→本館1～3階→部屋番号をクリック）。

活発な活動を続ける北海道大学総合博物館は、年間約10万人の来場者を迎えます。年内には、1999年の開館から累積で100万人を越す勢いにあります。

しかしそんな館長自慢の博物館にも、悩みがあることを最後にお話いただきました。まず、建物自体が130年余り前のもので老朽化が進んでいること、もともと理学部の建物なので総合博物館としてはスペースが不足する箇所もあること、そして専任スタッフの不足などです。

多くの観覧者を獲得し、独自の試みを積極的に進める博物館にも悩みがあることは意外でした。



津曲敏郎館長

北海道大学総合博物館は今年の秋から改修工事に入り、新たに生まれ変わります。工事に入る前に、皆様も博物館をご覧になってはいかがでしょうか。

（学芸グループ 種石 悠）

講座

サハリン州郷土博物館の諸活動

2014. 6. 7

講師 エフゲーニヤ・フィルソワ氏

（サハリン州郷土博物館 展示・研究課長）

オリガ・ソロヴィヨワ氏（同館 研究員）

5月24日～6月22日に当館ロビーで開催した写真展「忘れられた歴史のページ 20世紀サハリン先住民の暮らし」の関連事業として、同展を共催したサハリン州郷土博物館（ロシア連邦サハリン州ユジノサハリンスク市）の職員より講演いただきました。



E. フィルソワ氏



O. ソロヴィヨワ氏

本講座の前半では、フィルソワ氏よりサハリン州郷土博物館の活動概要を紹介いただきました。同館は1896年にアレクサンドロフスク（現在のアレクサンドロフスク・サハリンスキー）で開館した博物館を前身としています。その後1946年にユジノサハリンスクにある日本の旧樺太庁博物館の建物を受け継いで「サハリン州郷土博物館」として開館し、現在にいたります。

展示では施設内のほか、館庭にも大型の資料を常設して紹介しています。2000年より、同館は展示の拡充やリニューアルを順次進めてきました。最近ではバーチャル展示、電子目録など

新しい技術を積極的に取り入れて、利用者サービスの充実をはかっています。また、館独自の教育普及事業だけでなく、州などが主催する各種イベントの会場としての利用も盛んです。これらの取り組みにより博物館の古いイメージを刷新し、サハリンの地元民だけでなく、ロシア国内外からの観光客が多く集うようになっています。

本講座の後半では、ソロヴィヨワ氏よりご自身が担当する調査・研究活動を紹介いただきました。ソロヴィヨワ氏はサハリン北部ワール村出身で先住民ウイльтаの一人です。2010年に同館に就職して以来、館の研究事業の一環としてご自分のルーツでもあるサハリン先住民の文化や言語について調査・研究してきました。

サハリン先住民の生活は、ロシアや日本の間で翻弄された歴史のなかで大きく変わってきました。現在では誰もが通常ロシア語で話し、現代的な生活をしています。そのようななか、伝統的な言語や工芸技術の教育、伝統儀礼を受け継ぐお祭りなどの催事など、先住民文化の保存や復興を目指す取り組みも行われています。ソロヴィヨワ氏は講演のまとめとして、伝統的な文化を若い世代に伝えてゆくことは氏自身やご家族の人生そのものだとして述べられました。

（学芸グループ 山田 祥子）

講習会

フィンランドの伝統装飾
ヒンメリづくり

2014. 6. 22

講師 山本睦子氏（ヒンメリ作家・グラフィックデザイナー）

ヒンメリ（Himmeli）はフィンランドの伝統的なクリスマス装飾品で、豊作を祈願して作られていたそうです。材料にはライ麦のわらが使われます。

今回の講習会には、札幌でヒンメリ作家としてご活躍中の山本睦子氏に講師をお務めいただきました。

山本氏はヒンメリが素敵にできあがるようにと、ご自身でライ麦を栽培され、わらの太さや色が丁度よいときに収穫をされています。今回の講習会でもその麦わらを使わせていただきました。

同じ長さに切りそろえたわらに、長い針に通した糸を一筆書きをするように通して正八面体をつくります。この正八面体が基本になります。糸を強くひきすぎたりすると、わらが裂けてしまうので注意が必要です。

講習会では大小二つのヒンメリを作り、つなげて最後にタッセル（飾りふさ）を吊しました。

山本氏からは、フィンランドのさまざまなヒンメリの紹介やご自身の作品のスライド上映もあり、参加者のみなさんは、フィンランドやヒンメリにより親しみをもたれたようでした。

講師の山本氏が、ご自身デザインのお持ち帰りバッグなども用意してくださり、当館の講習会では珍しく、とてもおしゃれな雰囲気でした。

なお本講習会は北海道フィンランド協会の後援をいただきました。（学芸グループ 笹倉いる美）



ヒンメリ作りを指導する山本氏（中央）

講習会

キエプティンひも編み・
カレリアン刺繍^{ししゅう}

2014. 6. 28

講師 ヘイディ・フースコ氏（TAKKU 講師）

フィンランド手芸ユニットTAKKU講師のヘイディ・フースコ氏をお招きし、キエプティンひも編みとカレリアン刺繍の講習会を行いました。

キエプティンはフィンランド語で回転を意味します。二股のフォーク形の道具をくるくると回しながらひもを作り、なかにビーズを編み込んでプレスレットに仕上げました。

カレリアン刺繍はフィンランド東部のカレリア地方に伝わる刺繍技法です。図案には数字がふられていて、その順番通りに針をさしていくと、最後にはできあがる、一筆書きの刺繍です。表と裏が同じに仕上がるのがこの刺繍の特徴になっています。



キエプティンひも編みを指導するフースコ氏（中央）

数字を探しながら刺していくので、自分は何番を刺しているのか覚えておかなければならず、混乱される方もいらっしゃいましたが、最後には皆さん完成されていました。

（学芸グループ 笹倉いる美）

平成26年度 アイヌ文化理解研修会

体験して学ぶアイヌ文化(2)

2014. 7. 28

講師 床みどり氏、郷右近富貴子氏（アイヌ文化伝承者）
伊藤せいichi氏（アイヌ語地名研究者）

北方民族博物館では学校教育関係者を対象にした研修会も開催しています。夏休み期間中に、^{とこ}床みどり氏、^{ごうこう}郷右近富貴子氏に「体験して学ぶアイヌ文化：アイヌ料理づくりと試食」を、伊藤せいichi氏に「狩猟・漁労採集にかかわるアイヌ語地名」を指導していただきました。

なお7月30日には「道立北方民族博物館活用学習」のための指導者研修を開催し、オホーツク総合振興局管外からの参加者もありました。

（学芸グループ 笹倉いる美）

第29回北方民族文化シンポジウム網走

環境変化と先住民の生業文化

— 開発と適応 —

北方地域における資源開発が生業を中心とした先住民の伝統や文化に及ぼす影響と先住民側の対応を取り上げます。

■日程：平成26年10月4日(土)・5日(日)、
各日9:00～16:00

■会場：オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000）大会議室
〔網走市北2条西3丁目/TEL.0152-43-3704〕

■内容：国内外の専門家・研究者による研究発表
（日本語－英語の同時通訳付き）

関連事業：映画上映会「ジョバンニの島」

■日程：平成26年9月25日(木) 18:30～

■会場：オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000）エコーホール

※お申し込み・お問合せは、北海道立北方民族博物館
内・北方民族文化シンポジウム事務局（担当 博物館課：小田島、学芸グループ：中田）までご連絡ください。

オホーツクシリーズ⑥

こぎれ 古裂合わせ

はまだちづこ ～浜田智津子の四季のお細工もの

北見市でお細工ものの作家として活躍している浜田智津子さんの作品を紹介します。

四季をテーマにした、繊細で品のあるお細工ものの数々をお楽しみください。

■会期：平成26年10月11日(土)～10月26日(日)

■会場：北方民族博物館ロビー（観覧無料）

関連事業

平成26年10月11日(土)13:30～15:30

講習会 「はじめてのお細工物づくり」

講師 浜田智津子氏

参加料 500円

平成26年10月19日(日) 13:30～16:30

講習会 「お細工物づくり（中級）」

講師 浜田智津子氏

参加料 500円

INFORMATION

行事報告

◆6月14日(土)、講習会「ロシアのチャイ(お茶)文化 ～プリヌイづくり」(講師：山田祥子学芸員)を開催しました。

◆6月29日(日)、「ユハンヌス～北方民族博物館の夏至まつり」を開催しました。フィンランドのあそび「モルック」大会やコンサート、フラダンス披露などを行いました。



コンサートの様子

◆移動写真展「忘れられた歴史のページ 20世紀サハリン先住民の暮らし」を7月1日(火)～25日(金)北海道大学、8月11日(月)～9月20日(土)ロシア連邦サハリン州ノグリキ町郷土博物館で開催しました。

◆7月12日(土)、講演会「皮船とイヌ櫓の謎」(講師：渡部裕学芸員)を開催しました。

◆7月21日(月・祝)、海の日イベントとしてバイダルカ「アルガラップ号」試乗体験を開催しました。

◆7月26日(土)、はくぶつかんクラブ「北方民族のおもちゃ ついばむ鳥」(講師：永瀬早苗解説員)を開催しました。



◆8月2日(土)、はくぶつかんクラブ「北方民族のけん玉づくり」(講師：種石悠学芸員)を開催しました。

◆8月9日(土)、はくぶつかんクラブ「北方民族博物館でジャムと北欧パンケーキづくり」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。

◆8月23日(土)、はくぶつかんクラブ「ミニチュアそり作り」(講師：中田篤主任学芸員)を開催しました。

お知らせ

◆利尻町亦稚貝塚（またわっかかいづか）出土のオホーツク文化トナカイ角製品のレプリカが、完成しました。製品は2点あり、トナカイ角の全面にクジラやオットセイ、クマなどが精密に彫刻されています。北海道の文化財にも指定されているこの製品は、当時調査にあたっていた岡田淳子館長によって見いだされました。オホーツク文化の考古資料の中でも最も優れた造形のひとつとされる本資料のレプリカをぜひご覧ください。11月1日から公開します。

北方民族博物館だより

No. 94

平成26(2014)年9月26日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会